

vivo

水戸芸術館音楽紙 [ヴィーヴォ]

10

OCTOBER 2005

CONTENTS

マティアス・ゲルネ	
バリトン・リサイタル1,2
茨城の名手・名歌手たち3
SELF PORTRAIT 山口泉恵3
最近の公演から4
ネットマ & Petite 情報5
インフォメーション6



写真:マティアス・ゲルネ

ドイツ・リートの若き巨匠マティアス・ゲルネ、シューマンを歌う

10 / 16(日)マティアス・ゲルネ バリトン・リサイタル

男性歌手、受難の時代?

バーバラ・ボニー、アンネ・ソフィー・フォン・オッター、クリスティーネ・シェーファー、ナタリー・シュトゥッツマン……。水戸芸術館では近年、超一流の歌手ばかりを厳選して招聘し、歌曲、主にドイツ・リートの愉しさを存分に味わっていただいています。

ここでちょっと気になることが……。そう、男性歌手によるリサイタルがしばらくご無沙汰しているのです。館の公演記録をたどると、1996年10月のクリストフ・ブレガルディエン(テノール)とアンドレアス・シュタイアー(フォルテピアノ)によるリサイタルまで遡らなければなりません。私たち、企画制作のスタッフとしても、女性歌手ばかりを特集したいわけではなかったので、結果として、近年、女性歌手たちにくらべて男性歌手たちに「何としても水戸芸術館に呼びたい」と思わせるようなアーティストが現れなかった、ということになります。

では、なぜ近年ドイツ・リートの世界において男性が劣勢とも言える状況に陥っていたのか。私は名バリトン歌手、ディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウの巨大な存在にその原因を求めます。フィッシャー＝ディースカウの歌唱芸術は、彼に続く

男性歌手たちにとって、あまりに完璧、網羅的であり、言葉の上で「理知的過ぎる」などと批判することは出来ても、実際の歌唱で彼の表現を凌駕することは至難の業だったのです。(裏を返せば、男性用リートに厳格にレパートリーを絞っていたフィッシャー＝ディースカウの影響から、女性歌手は比較的自由でいられたということでしょう。また、先述のブレガルディエンは、シュタイアーとともに古楽的アプローチを前面に打ち出すことで、フィッシャー＝ディースカウの束縛から逃れた、とも考えられます。)

若き巨匠マティアス・ゲルネ

そうした男性歌手・受難の時代も、いまや終焉のときを迎えているようです。マティアス・ゲルネ(バリトン)、クリスティアン・ゲルハーエル(バリトン)、ローマン・トレーケル(バリトン)、シュテファン・ゲンツ(バリトン)といった新しい才能の持ち主が次々に頭角を現しているのです。中でもマティアス・ゲルネは、「何としても呼びたい」と切望するに値する、久々の本格派男性リート歌手と言えるでしょう。

マティアス・ゲルネは1967年、ドイツ・ヴァイマ

ルの生まれ。85年からライプツィヒ音楽大学でハンス・ヨアヒム・バイヤーのもとで声楽の勉強を開始。『旧東ドイツの音楽教育システムは厳しくも恵まれたものでした』(ゲルネ談)。その後、ディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウ、エリーザベト・シュヴァルツコップにも師事。『バイヤー先生からは技術、基礎を学び、F＝ディースカウ先生からは歌手としての精神の根本を、シュヴァルツコップ先生からは響きの広がり、音色の広がり、そして想像力の広がりを教えていただきました』。やがて、ゲルネは新時代を担うリート歌手として、ヨーロッパ中で知られる存在に。アシュケナージ、ブレンデル、アンスネス、シュマルツ、シュナイダーといった強力なピアノ伴奏者とともに、ロンドンのウイグモア・ホールをはじめとする一流の演奏会場でリサイタルを行います。オペラでも、1997年のザルツブルク音楽祭デビュー(モーツァルト 魔笛)を皮切りに、メトロポリタン歌劇場、コヴェント・ガーデン王立歌劇場、チューリヒ歌劇場などに次々と出演。昨年夏のサイトウ・キネン・フェスティバルでは、小澤征爾指揮の『ヴォツェック』で題名役を演じ、圧倒的な賞賛を浴びています。



写真:アレクサンダー・シュマルツ



写真左から;
駒橋雅代、川澄萌野、寺山香澄



「形的美しさ」を超えて・・・

では、マティアス・ゲルネはどのようにしてフィッシャー＝ディースカウという巨大な存在を乗り越え、ドイツ・リートに新たな地平を拓こうとしているのでしょうか？ 評論家による鋭い洞察と、ゲルネ自身の発言が、その興味深い謎を解き明かしてくれそうです。

吉田秀和・水戸芸術館館長は、ゲルネの歌について、こう綴っています。

『ゲルネという歌手は近年で最も注目に値する一人である。近ごろ評判のゲルハーエルも、もちろん悪くないし、この人もシューベルトを歌って、リズムとダイナミックの面で断然個性的な味わいを打ち出している。それは「歌の演劇的側面」を強調する歌い方といっても良いかもしれない。これはゲルネにもみられるものなのだが、ゲルネの声はもっと暗く低く、それにヴィブラートの振幅がより大きいせいから「声の身ぶりの表現」をする時も、ゲルハーエルよりもっと深いところまで届き、大きく伸びてゆくことを目指しているように思われる。

ゲルネをきいていると、同じドイツ歌曲を歌っても、かつて私たちの若いころから長い間にわたってずっと主流だったフィッシャー＝ディースカウの流れをつぎながらも、ずいぶん違った新しい歌い方に変ってきていることを痛感させられる。その変り方を、一言でいえば、「形の整った美しさから表現の重視に向って」ということになるのではないかと。

断るまでもないだろうが、私は彼の歌唱の技法や外見の姿勢のことをいっているのではなく、内容のことをいっているのです。

ゲルネの今度の曲目はみなシューマン。シューマンの音楽では外観と内容の関係はシューベルトと違う。ゲルネの歌い方も当然シューベルトの場合とは違ってくるだろう。では、どう違うか？(吉田秀和 / 公演チラシより)

ゲルネは、演奏家らしく、実直な言葉で語っています。

『確かにF＝ディースカウ先生もシュヴァルツコップ先生も、すべてを語りつくしてしまっている、と言ってしまうことも可能です。でも、私自身、彼らの歌に共感する部分があれば、理解できないところもあるし、自分の個性、自分の声とは異なっています。同じように歌うわけではありません。

また、同じ曲を歌っていても、彼ら2人もまったく違う歌になっていますよね。では、何をもちつた新たな何か加わるか、というと、これは、私の人格がどう成長して行くか、個性をどこまで培って行

くか、これが最終的な違いになってくるのではないかと、と思います。

今はオールラウンドのレパートリーを持つ歌手がもてはやされていますが、しばしば、それは深さに欠けることも多い。私は専門性と、深い、高い質を追求したいのです。そのためには、自分を知り、なにが自分にあっているか、自分のレパートリーをどこまで深めていけるかが勝負になってくると思います。

永遠のレパートリーと呼ぶべき歌曲があります。これらは何度も何度もさまざまな歌手が歌っているにもかかわらず、決して廃れない。それは伝統と同時に、その歌手が生きている今、その接点が重要だからです。伝統を重視しつつ、今の自分というものとひとつに結びつける接点を見出して行く。その方向性は、偉大な先人たちが示してくれているけれど、最終的には、コンサートで聴く「今」は、まったく別のものが生み出されます。これが歌う意味だと思えます。(レコード芸術 2004年9月号 國土潤一氏によるインタビュー記事より)

歌手自身の人格や個性、そして歌っているその瞬間瞬間の感情が、「永遠のレパートリー」と呼ぶべき名曲に深く浸透していくことを厭わないマティアス・ゲルネ。このようなゲルネの姿勢は、吉田秀和館長が「形の整った美しさから表現の重視に向って」と評する新しい時代の歌唱表現に結びつくものである、と言えるのではないのでしょうか。

シューマンの名歌の数々を

今回のリサイタルで歌われるのは、すべてドイツ・ロマン派の作曲家ロベルト・シューマン(1810～56)の歌曲です。それぞれの曲について、簡単にご紹介しましょう。

1) 詩人の恋 作品48

ハイネ作『歌の本』から選び出された16の詩による歌曲集。シューマンが意図する内的物語に沿うように配列されている。初々しい恋の芽生えから失恋、そして新たな旅立ちに到る一人の詩人の感情の推移を繊細かつ豊かに描く。第1曲「うるわしき、妙なる5月に」は、シューマンを代表するロマンティックな歌曲として特に有名。

2) ハイネの詩による3つの歌

“海辺の夕暮れ”(ロマンスとバラード 第1集 作品45 第3曲)、“ぼくの愛はかがやき渡る”(5つのリートと歌 作品127 第3曲)、“ぼくの馬車はゆっくりと行く”(4つの歌 作品142 第4曲)から

なる、ゲルネ自身の選曲による3つの歌(作曲者がまとめたものではない)。

3) リーダークライス 作品24

ハイネ作『歌の本』から選び出された9つの詩による歌曲集。リーダークライス(Liederkreis)は直訳すると「歌の環」の意。詩人の恋のような物語性はないが、各曲が内的なゆるやかな関連を持っている。

すべてがハイネの詩による歌曲であることはすでに上に記したとおりですが、これらの曲にはさらに共通した背景があります。それは、すべてが1840年に作曲された歌曲である、ということです。

クララ・ヴィークとの恋愛、結婚を、その父フリードリヒ・ヴィークに反対、妨害され続けた間、シューマンはクライスレリアーナや幻想曲などのピアノ曲で言葉なき歌を綴ってきました。しかし、その長く厳しい冬の後、ようやくクララとの結婚が決まると、突然、歌曲の作曲へと転じます。それが1840年です。

シューマンはクララとの結婚の喜びやそれまでの苦しみを直接声に出して語るべく、堰を切ったように歌曲を生み出したのでしよう。これらの歌曲には、シューマンの狂おしいまでのロマンティックな感情の発露があります。また、苦難の時代に磨き上げたピアノの書法の充実が、主人公の内に秘めた感情や詩に描かれる光景を映し出し、ドイツ・リートの多層的な魅力を明らかにしてくれます。

若き巨匠マティアス・ゲルネと名伴奏者アレクサンダー・シュマルツが、シューマンの名歌の数々をお届けするこのリサイタル。どうぞお聴き逃しなく。
《関根》

マティアス・ゲルネの最新CD

シューベルト: 歌曲集 冬の旅 (UCCD-1110)



昨年のレコード・アカデミー賞(音楽部門)を受賞した名盤。ゲルネの鋭い心理描写とブレンデルのニュアンス豊かな伴奏があいまって、ドラマティックな「冬の旅」へと聴き手を誘う。2003年、ウィグモア・ホールでのライブ録音。

シューマン 歌曲集 (UCCD-1118)



ゲルネのシューマン最新録音。今回のリサイタルで歌われるハイネの詩による3つの歌も含む全25曲。ピアノは、昨年のシェーファーのリサイタルで名伴奏を聴かせたエリック・シュナイダー。



写真左から；
高野 綾、志村江美、
清水亜矢、川上茉莉絵、
石水晶子



写真；山口泉恵

輝かしい未来の音楽界に向けて 10 / 8 [土] 茨城の名手・名歌手たち第16回 司会：畑中良輔

茨城県に関わりのある優れた演奏家を紹介するコンサート『茨城の名手・名歌手たち』。水戸芸術館開館以来、毎年継続して開催しています。これまでに、221名(ソロ)と10組(アンサンブル)の「名手・名歌手たち」をご紹介してきました。この中には、現在、国内外の大舞台上で活躍している音楽家もたくさんいらっしゃいます。また、水戸芸術館では、「名手・名歌手たち」の“その後”のサポートにも力を入れています。『クリスマス・コンサート』、『プロムナード・コンサート ヴァリエーションズ』、『水戸の街に響け! 300人の《第九》』などの、水戸芸術館の他の企画にご出演いただくなど、活躍の場はどんどん広がってきています。

さて、5月28日[土]に行われたオーディション(応募総数:61)に見事合格し、10月8日の『茨城の名手・名歌手たち 第16回』に出演するのは、管楽器(3名)、打楽器(1名)、声楽(4名)の8名。演奏会は、オーディション審査委員長をつとめた畑中良輔氏の楽しい司会により、ガラ・コンサート形式で進められます。

まずは、3名の管楽器奏者をご紹介します。

水戸第三高等学校音楽科を経て、今春武蔵野音楽大学を卒業したクラリネットの駒橋雅代さんによる、ロヴェッリョの 椿姫 の旋律による演奏会用幻想曲で、コンサートは華やかに幕を開けます。そして、オーボエの川澄萌野さん。現在、東京芸術大学3年生でバロック・オーボエも勉強している川澄さんは、J.S.バッハのオーボエとチェンバロのためのソナタを演奏します。1番大きな管楽器、チューバを演奏するのは、東京音楽大学3年生の寺山香澄さん。様々な楽器で演奏されるシューマンの アダージョとアレグロ(原曲はホルンとピアノ)を、チューバという楽器でどのように聴かせてくれるのでしょうか。

続いて、打楽器の高野綾さん。彼女が演奏する楽器はマリンバです。オーディションでは一柳慧の独奏マリンバのための作品を鮮やかに演奏しました。演奏会では、スティーヴンスの リズミック・カプリース とチュエカ(ゼルツマン編曲)の ロス・パラグラス を聴かせてくれます。

後半は声楽の4名。今回は4名ともソプラノです。志村江美さんは、現在、二期会会員。様々なオペラや演奏会に出演しています。R.シユトラウス

の歌曲やバーンスタイン キャンディード の“着飾って、きらびやかに”など、バラエティ豊かな4曲を歌います。『名手・名歌手たち 第10回』に出演した当時は高校生だった清水亜矢さんは、東京芸術大学大学院の1年生になりました。より女性らしく磨きのかかったその声で聴かせてくれるのは、グノー、アーン、ドリーブと、フランスの作曲家による作品です。今回出演する中で最年少の川上茉莉絵さんは、水戸第三高等学校音楽科の3年生。オーディション時には、高校生ながら安定した声で審査委員を唸らせました。演奏会では日本歌曲やオペラ・アリアに挑戦します。そしてトリをつとめるのは石水晶子さん。今夏はフランスに渡ってアカデミーなどに参加し、ますますその実力に磨きをかけています。プログラムは清水さんと同じくフランスの作曲家によるもの。特にコワトーの作品は、「在仏中に作曲家ご本人とお会いしてお話を聞いている」とのことで、期待は高まります。

フレッシュな8名の「名手・名歌手たち」の演奏を聴きに、そして、彼女たちの未来を応援しに、コンサートホールへどうぞ足をお運びください。

《馬場》

SELF

石岡市在住のピアニスト 山口泉恵が、1810年に生まれた二人の作曲家の「愛・人生・音楽」を奏でます。

10 / 2 (日)
山口泉恵
ピアノ・リサイタル

私は「茨城の名手・名歌手たち 第1回」でシューマンの クライスレリアーナ を演奏いたしました。このたび水戸芸術館でのリサイタル開催となり、再び大好きな クライスレリアーナ を演奏できますことを、たいへん嬉しく思います。

さて、プログラムは前半がショパン、後半がシューマンです。共に1810年に生まれ、ロマン派音楽の中心的人物です。しかし二人の世界観は大き

く異なり、それぞれの作品に現われています。

ロマン主義は、産業革命やフランス革命を経てヨーロッパが近代市民社会へと変わる中で、それまでの古典主義的な均整のとれた表現や、合理主義的な理性信仰に対抗して、個人の感性と想像力を重んじ、自由な表現を追求する意識改革の運動といえます。そして、文学や音楽や思想などあらゆる分野で、きわめて主観的で感受性の強い作品が生み出されました。

シューマンは文学や哲学に造詣が深く、音楽と文学が深く呼応したロマン派らしい作曲家でした。困難にみちたクララとの恋愛から生み出された クライスレリアーナ には、熱狂とうつを繰り返す夢見がちな彼の性格がよく現れており、微妙なハーモニーの変化に心の動きが読み取れます。私は、彼が苦しい現実から逃れるように夢の中に理想の姿を見出し、幸福な思いにひたるのを感じます。

一方ショパンは、ただピアノだけに献身したユニークな存在の作曲家でした。彼には空想的なイメージへの熱中や神秘主義への執着、演劇性、文学性といったものが無く、わざとらしいものは洗練され、土台のところでリアリスティックです。祖国への熱い思い、不幸に終わった伯爵令嬢との恋愛、虚弱体質と病氣、ジョルジュ・サンドとの奇妙な同棲生活などから生み出された音楽に、私は生きることの喜びと哀しみを感じます。リストが「ショパンの詩的天分の最高の発露」と讃えた24の前奏曲からは、彼の魂の叫びが聞こえます。サンソン・フランソワは言います、「ショパンの音楽は人生なるものではない。われわれの人生だ。」と。

人生の光と影が二人に書かせた音楽は、皆様は何を想わせるでしょうか。

山口泉恵

最近の公演から

AUGUST

横田鈴琥 尺八リサイタル(8月27日)

水戸市在住の尺八奏者、横田鈴琥さんの、初の芸術館でのリサイタル。ソロの作品(巣鶴鈴慕抄:青木鈴慕作曲)にはじまり、箏の長澤良子さんや日本舞踊の若狭彰扇さんをはじめとする7名の賛助出演の方々との共演で、古典から現代までの名曲を綴った、非常に贅沢なコンサートでした。締め括りは、横田さんの師匠でもある人間国宝の尺八奏者、青木鈴慕師との共演で、琴古流尺八本曲 鹿の遠音を。熱のこもった演奏で会場を沸かせました。「何度舞台を踏ん

でも、その度に緊張しますね」と言って舞台へ向った横田さん。背筋をのばし、共演者の方々へ敬意を表しながら、すべてのプログラムを集中力高く演奏しました。ピリッとした緊張感につつまれながらも笑顔を絶やさない横田さんのお人柄が、演奏にもよく表れていたように感じます。

《馬場》

アンケートから 尺八の澄んだ音色・むら息のせつなさがよく表現されている。気力が充実した演奏でした!(K.T.さん) さすがですね。心が洗われるようでした。ありがとうございました。(新治郡八郷町:Y.H.さん) 国宝クラスの人に接することが出来て感激しています。黒髪は小学生の時に習ったのでなつかしかったです。(石岡市:K.M.さん) 邦楽のすばらしさを満喫できた。(三鷹市:K.A.さん) 鹿の遠音 がよかったです。(水戸市:I.H.さん)



プロムナード・コンサートの小部屋

夏休みの終わり8月28日[日]に、夏休みスペシャルとして山口綾規さんによるプロムナード・コンサートを開催しました。プログラムは、ミッキー・マウス・マーチやチム・チム・チェリーなど、ディズニーの名曲が次々と登場するディズニー・メドレーに始まり、モーツァルト:オーボエ協奏曲 K.370(368b)より 第3楽章、アーレン:虹のかなたに、と楽しい曲が盛り沢山。ちなみに、これらの3曲はすべて山口さんの編曲によるもの。オルガンの魅力が存分に生きたアレンジで、それぞれの曲が見事に生まれ変わっていました。そして最後は、エルガー:威風堂々 第1番で、華やかに締め括りました。山口さんの楽しいお話を交えたコンサートに拍手は鳴り止まず、アンコールとしてJ.シュトラウス(山口綾規編曲)のラデツキー行進曲を演奏。ウィーン・フィルのニュー・イヤール・コンサートでもお馴染みのこの曲、芸術館のエントランスホールも手拍子で大いに盛り上がりました。

さて、10月と11月には、「オルガン名曲ライブラリー」を開催します。オルガンの名曲を、作曲家や時代など様々なテーマに分けてご紹介するシリーズとして始まった、この「オルガン名曲ライブラリー」も、10月1日[土]で7回目となります。

7回目のテーマは、作曲家 リスト。19世紀最高のピアニストのひとりでもあるハンガリーの作曲家、フランツ・リストのオルガン作品に触れてみます。甘美でロマンティックなリストの作品は、技巧や表現がとても困難。オルガン作品も同様です。演奏は、プロムナード・コンサートでもお馴染みの椎名雄一郎さんです。この「オルガン名曲ライブラリー」にも、3回目と4回目で パッ

ハ以前の作曲家たち 北ドイツ・オランダ篇 をテーマに出演しています。椎名さんは、現在は、豊田市コンサートホール専属オルガニスト。2005年3月より、新世代のオルガン旗手として、J.S.バッハのオルガン作品全曲演奏会に10年の月日をかけて挑んでいます。そんな椎名さんが今回「是非とも弾きたい!」と手を挙げたのが、リストのオルガン作品です。プログラムは3曲(下記ご参照ください)。リストのオルガン曲と言えばこれ!というくらい有名な大作2曲と、編曲も多く手がけたリストがショパンのピアノ曲をオルガン(もしくはハルモニウム)のために編曲した作品をご紹介します。

そして、11月26日[土]に開催する8回目は、作曲家 レーガー をテーマにお送りします。マックス・レーガーは、リストより少し後の20世紀初頭を生きたドイツの作曲家。その作品の数は膨大で、オルガン作品だけでも100曲は超えます。今回は、この中から厳選した、4曲を(下記ご参照ください)。複雑なハーモニーを繰り広げるレーガーの作品は重厚なものも多く、聴き応え抜群です。演奏は、こちらもお馴染みの高橋博子さん。高橋さんは、この「オルガン名曲ライブラリー」の記念すべき1回目に、J.S.バッハ をテーマにご出演いただきました。オルガニストとして大活躍中の高橋さんは、最近では若手ヴァイオリニストの五嶋龍さんとの共演(五嶋さんのCD「Ryu Goto」にも参加)など、ソロのみならずアンサンブルや伴奏者としても演奏活動を行っています。

いつものプロムナード・コンサートより、ちょっとだけ豪華な「オルガン名曲ライブラリー」。今まさに脂ののったふたりのオルガニストの名演による、ふたりの作曲家の名曲を聴きにいらっしやいませんか。《馬場》

「オルガン名曲ライブラリー」 リスト

10月1日[土]12:00 ~ / 13:30 ~

【出演】椎名雄一郎

【曲目】

リスト:バッハの主題による前奏曲とフーガ

ショパン =リスト:24の前奏曲 作品28より 第4番 / 第9番

リスト:「わたしたちへ、救いを願う人々へ」による幻想曲とフーガ

「オルガン名曲ライブラリー」 レーガー

11月26日[土]13:30 ~ / 15:00 ~

【出演】高橋博子

【曲目】

レーガー:序奏とパッサカリア

ベネディクトゥス 作品59の9

トッカータ 作品59の5

幻想曲とフーガ 二短調 作品135b

【会場】水戸芸術館エントランスホール

入場無料

プログラムは変更になる場合もございます。あらかじめご了承ください。



*nettama=ネットワークする猫、タマ。
芸術館のコンサートをサカナに
いろんなところへnettamaします。

ワーカホリックな二人

4ページ目の『プロムナード・コンサートの小部屋』をご覧の通り 今年の10月と11月のOML(オルガン名曲ライブラリー)では、それぞれリストとレーガーというふたりの作曲家の特集が組まれる。これは、なかなか面白いことになりそうだから、お時間のある方はぜひお聴きになれることをお勧めする。それぞれ、椎名雄一郎さんと高橋博子さんという今バリバリに売り出し中のオルガニストが登場するというのももちろん楽しみなのだけれど、リストとレーガーのオルガン曲をこれだけまとめて聴けるという機会も、そうあるものじゃない。

かく言う僕もひそかに楽しみにしているのだけれど、なかば偶然に連続して登場することになったこのふたりの作曲家の間には、どこか共通するものがあるなあ、と気づいた。フランツ・リスト(1811~86)、そしてマックス・レーガー(1873~1916)、どちらも19世紀に生まれたドイツの作曲家(リストはハンガリーの作曲家、ともいえるが)ではあるが、世代的にはほとんど重なることのないこの二人の共通点を探りながら、そのポートレイトを描いてみよう。

まず「芸術館的」には、この二人の作曲家の作品は、プロムナード・コンサートを別とすると、その名声のわりに演奏会のプログラムに登場することが意外に少ないという点で共通している。リストはご存知の通りピアノの大ヴァルトゥオーゾで、超絶技巧練習曲や巡礼の年、ハンガリー狂詩曲など山のように名曲を書いているのだけれど、何度か芸術館のピアノ・リサイタル曲目として登場したピアノ・ソナタ、口短調を除けば、「茨城の名手・名歌手たち」でしばしばヴァルトゥオーソ的作品が取り上げられる以外、そのピアノ曲が演奏会を飾ることはごく少ない。レーガーにいたってはもっとそうで、室内楽やピアノ曲など、芸術館で演奏されてよさそうな編成の作品はいくらでもあるのに、登場したのは5年前のATMアンサンブル演奏会で取り上げられた弦楽六重奏曲とかほんとうにわずかだ。

いったいなぜだろう? ふたりの音楽を聴く

と、なんとなくわかる気がする。万事につけスマートさを好み、時間をかけた熱弁よりも短くキャッチーなフレーズの方が受け入れられやすいこの現代社会において、彼らの音楽はいかにモトウ・マッチなんだ。ショパンのエチュードを全部聴いた人はたくさんいるだろうけど、リストの超絶技巧練習曲を全曲聴いたことがある人が、ピアニスト以外でどのくらいいるだろうが、すみません、僕も自信ないです。技巧につく技巧、華麗なブラヴァー、急速な連続10度(!)...ピアニスト・リストのテクニックのありっただけをつぎ込んだこれらのピアノ曲は、圧倒されるんだけど聴いていてほとんどめまいがする。じゃあ彼が創始した交響詩はどうかというと、タツソ:嘆きと勝利、プロメテウス、追悼英雄書簡詩、フン族の戦いとこれまたタイトルも内容もものものしい。

一方のレーガーはどうかというと、これがまたやっかいだ。とにかく彼の曲はそれ自体が目的と化したかのような半音階や転調の嵐で聴いていて幻惑されることこの上ない。音楽自体は「お、ブームスみたい」とか「後期ロマン派だなあ」とか思うのだけれど、聴き進むうちに迷路に入っていくみたいになる。でも、「技巧の遊び」という感じは不思議としないんだよね。すごいエネルギーがいつも音楽にみなぎっていて、アクロバットみたいな転調は、ちょうどリストにとってのピアノの超絶技巧みたいな、エネルギーの「持って行き場」だったのじゃないかなあ、と思わせる。ATMアンサンブルで弦楽六重奏曲が演奏されたときも、アンケートでは「なんだかよくわからないけど妙に興奮した。レーガー、すごい!!」って声がけっこうあったことを思い出す。

こんな二人だから、作品数がめちゃくちゃに多くなるのは当然かもしれないね。たとえばリストのピアノ曲を全部聴く、ということは、僕の人生においてほとんど不可能事ではないかと思う。最近、ついに彼のピアノ曲の完全全曲録音というのが、イギリスのピアニストによってほとんど20年がかりで果たされたのだけれど(ハイペリオン・レーベルから)全95枚という威容だった。さらにリストはそれだけじゃない、管弦楽曲もたくさん書いたし、歌曲もかな

りあるし、宗教的な合唱曲だって60曲くらいある。いっぽうのレーガーだって負けてはいない。生きた人生はリストの約半分だけれど、作品番号は145におよび、その中にはひとつの作品番号で複数の曲を含むものがたくさんあるし、さらに作品番号のない曲もかなりあるから、総数いったいいくつになるやら想像もできない。しかもその中には1時間におよぶヴァイオリン協奏曲、みたいな大曲がいくらでも転がっているのだ。ちなみにレーガーという人は信じられないくらいの大食漢&大酒飲み&ヘヴィ・スモーカーだったそうで、愉快的エピソードがたくさん伝えられている。たとえばあるレストランで「2時間の間ピフテキを運び続けてくれ」とオーダーしたとか(一切食べ終わると次のがやってきてまた食うというペースだったらいい)あるときシューベルトの鱒をみごとに演奏したらお客さんが感動して鱒を5匹届けてくれたので、そのお客さんに返事をしたためて曰く「次の演奏会ではハイドンの牡牛のメヌエットを演奏いたします」とか、そんなのばっか。

尋常でないエネルギーをその音楽の中で爆発させたこの二人に追いつくのは容易なことではない。でも、生きることの目的とか、そういうものがはなはだ見えにくく、ぼんやりした疲労感がつきまとうこの世の中だからこそ、彼らの高カロリーな音楽は、なにかだいじなことを教えてくれるかもしれない。今度のOMLは、そのいい機会じゃないかなあ。

ちなみにリストは、疾風怒濤の活躍を繰り広げたのち、晩年は宗教に帰依し、深い霧のように謎めいた作品を、もはや誰のためでもないかのように書き続けた。調性のないバガテルとか、悲しみのゴンドラとか、別人のように不思議な世界だ。すべてをやりつくした人のたどり着いた超越の境地のような。レーガーも、最後の頃の作品には、透明なテクスチュアへ向かっていく傾向が見られるという。あきらかに不摂生と過労で早死にしたこの作曲家が、もしもっと長く生きたらどんな場所にたどり着いていたのか、想像するのは興味深いものがあるね。

information

チケットに関するお問い合わせ

...水戸芸術館チケット予約センター / 029-231-8000
営業時間 / 9:30 ~ 18:00(月曜休館)

公演内容や企画に関するお問い合わせ

...水戸芸術館音楽部門 / 029-227-8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

NHK-FM 水戸「芸術よもやま話」金曜日 18:15頃 ~ 15分ほど。水戸周辺
83.2MHz、日立周辺84.2MHz。

チケット・インフォメーション 10月1日(土)発売分

.....
庄司紗矢香 ヴァイオリン・リサイタル
12/1(木)19:00開演 料金(全席指定):A席¥4,000 B席¥3,000
クリスマス・プレゼント・コンサート2005
12/23(金・祝)17:00開演 料金(全席指定):A席¥3,000 B席¥2,000

これからの演奏会・残席情報

○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) x...残席なし 中央...中央
ブロック 左右・裏...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

山口泉恵 ピアノ・リサイタル 10/2(日) ...自由席
茨城の名手・名歌手たち 第16回 10/8(土) ...自由席
マティアス・ゲルネ パリトン・リサイタル
10/16(日) ...中央、左右
水戸室内管弦楽団第63回定期演奏会
11/5(土) ...中央x、左右・裏
11/6(日) ...中央x、左右・裏
水戸室内管弦楽団第64回定期演奏会
11/19(土) ...中央x、左右・裏
11/20(日) ...中央x、左右・裏
佐藤篤 ピアノ・リサイタル 12/10(土) ...自由席

9/13(火)現在の状況です。

公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケット
カウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証
(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演
もございますので、予めお問い合わせ下さい。

固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な10月のスケジュール

コンサートホールATM

山口泉恵 ピアノ・リサイタル
10/2(日)14:30開演 料金(全席自由):¥2,500
茨城の名手・名歌手たち 第16回
10/8(土)18:00開演 料金(全席自由)¥1,500
マティアス・ゲルネ パリトン・リサイタル
10/16(日)14:00開演 料金(全席指定):¥4,500
水戸市立第二中学校第57回清流祭合唱コンクール
10/18(火)13:00開演 入場無料
水戸市立第一中学校 日の縦祭合唱コンクール
10/23(日)11:30開演 入場無料
水戸市立石川小学校創立50周年記念コンサート
10/29(土)13:00開演 入場無料

エントランスホール

パイプオルガン プロムナード・コンサート
10/15(土)12:00 / 13:00 10/22(土)13:30 / 15:00
10/30(日)12:00 / 13:30
「オルガン名曲ライブラリー」 リスト
10/1(土)12:00 / 13:30 出演:椎名雄一郎
入場無料 演奏は各回20分程度です。

ACM劇場

『ドレッサー』
10/2(日)16:00開演 料金(全席指定):A席¥6,000 B席¥3,500

水戸芸術館友の会第29回講演会

「水戸芸術館開館15周年記念連続講演会」
- 水戸芸術館のこれまで、そしてこれから -
第1回 10/8(土)14:00~16:00「水戸芸術館とまちづくり」と施設見学
大津良夫(事務局長)
第2回 10/9(日)14:00~16:00
第1部「水戸室内管弦楽団の活動について」 小口達夫(専属楽団総楽団長)
第2部「これまでの演奏会から」
矢澤孝樹(音楽部門主任学芸員)、関根哲也、中村晃(音楽部門学芸員)
第3回 10/15(土)14:00~16:00 トークと映像「劇場は何をつくる場所か」
松本小四郎(演劇部門芸術監督)、長谷川裕久(演劇部門学芸員)
第4回 10/16(日)14:00~16:00
「映像でつづる展覧会の歩みと現代美術の魅力」
逢坂恵理子(美術部門芸術監督)、森 司、浅井俊裕(美術部門主任学芸員)
入場無料

萬狂言水戸公演 ~ 九世野村万蔵襲名記念公演 ~
10/22(土)18:30開演 料金(全席指定):S席¥4,000 A席¥3,000 B席
¥2,000団体(S席10名以上)¥3,600

現代美術センター

「X-COLOR / グラフィティ in Japan」
10/1(土)~12/4(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)
休館日:月曜日 ただし10/10(月・祝)は開館、翌10/11(火)は休館。
入場料:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600
中学生以下・65歳以上・各種障害者手帳をお持ちの方は無料

茨城の主な10月の演奏会

佐川文庫 TEL / 029(309)5020

-若きピアニストたち- 尾崎有飛 ピアノ・リサイタル 10/29(土)18:00開演

茨城県民文化センター TEL / 029(241)1166

菊池智恵子 ピアノ・リサイタル 10/14(金)18:30開演
フィンランド放送交響楽団 10/20(木)18:30開演

水戸市民会館 TEL / 029(224)7521

ネクサスプラスバンド11thコンサート 10/1(土)14:00開演
「レクイエムを歌う会」コンサート 10/2(日)13:30開演
ロシア民族アンサンブル「ペリョースカ」水戸公演 10/8(土)18:30開演
第31回芸大同声会茨城県支部演奏会 10/23(日)14:00開演

ひたちなか市文化会館 TEL / 029(275)1122

東京音楽大学交友会演奏会 10/10(月)13:30開演
ひたちなか市民オーケストラ第24回定期演奏会 10/16(日)14:00開演
(問)ひたちなか市民オーケストラ 加藤 TEL / 029(273)5506

日立シビックセンター TEL / 0294(24)7755

子どものためのプロムナード・コンサート「小曾根真 ジャズのABC」
10/19(水)18:30開演

常陸太田市民交流センター・パーティホール TEL / 0294(73)1234

東京室内管弦楽団 映画音楽&名曲コンサート 10/29(土)18:30開演

東海文化センター TEL / 029(282)8511

クリストファー・ハーディ&新谷祥子 パーカッション・デュオ
10/2(日)15:00開演

ギター文化館 TEL / 0299(46)2457

MAYAコンサート 10/2(日)15:00開演
宮下祥子 ギターリサイタル 10/23(日)15:00開演

ノバホール TEL / 029(852)5881

筑波大学管弦楽団第58回定期演奏会 10/7(金)19:00開演
ウェイウェイ揚琴演奏会 10/10(月)14:00開演
筑波研究学園都市吹奏楽団第19回定期演奏会 10/16(日)14:00開演
暮らしの花とピアノコンサート
~ 遠藤郁子シヨパンの響き ~ 10/22(土)14:00開演
レ・ヴァン・フランセ演奏会 10/29(土)15:00開演
遠山慶子&ウィーンフィルメンバーによる演奏会 10/30(日)14:00開演

結城市民文化センターアクロス TEL / 0296(33)2001

加古 隆 ピアノ・コンサート 10/16(日)14:00開演

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] 2005年10月発行 第110号
編集・発行 / 水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8
TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130
e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp/]

編集 / 水戸芸術館音楽部門(五十音順):
佐川真美 関根哲也 中崎美智代 中村 晃
馬場千恵 矢澤孝樹(編集長)
DTP / office west
印刷所 / 株式会社あけぼの印刷社

次号は...
榎本大進! ギルバー! クスマウル!
アーティストの肉声もきけるかも?